

ハンドボール競技におけるグループ攻撃戦術の構造分析

－センターをきっかけとする45との2対2を中心に－

堀 俊介（ 秋田大学 ）

1. 目的

本研究の目的は、センターの1対1をきっかけとする45との2対2を、世界トップレベルにあるクロアチアのセンター、L.シンドリッチのプレイから抽出し、類型化することである。

2. 研究方法

- 1) 対象 2017年世界男子ハンドボール選手権大会のビデオ資料から、クロアチアチームの3位決定戦の試合。
- 2) 方法 発生論的運動学における「縁どり分析」(金子、2007)を共同観察によって行う。
- 3) 抽出 センターをきっかけとする45との2対2の典型的な場面。

3. 結果と考察

「共同的ゲーム分析」(佐藤、2002)を用いて、間主観的な観察分析を行った。また、既存の基本コンビネーションのとらえ方を参照しながら、特に金子の述べるカン創発能力のカテゴリーのうち、「伸長能力」、「先読み能力」、「状況シンボル化能力」を用いて記述を試みる。観察分析の際には、原資料の中から典型的な場面を抽出・編集し、記述しながら類型化、名称付けをした。その結果、センターをきっかけとする45との2対2は、以下の4つに類型化できた。

1) 「センター1対1突破型」

センターの1対1による突破。45とのあわせにより、単純な1対1の突破ではなく、2対2の中の1対1による突破としてとらえる。

2) 「パラレル突破型」

センターの1対1に45がパラレルであわせることによる突破。センターの1対1に対して、DFが2人引き寄せられた場合にパラレルを選択する。

3) 「クロス突破型」

センターの1対1に45がクロスであわせた

ことによる突破。センターの1対1に対してDFが大きくひきつけられた場合、クロスを選択する。2人のOFで1人のDFを攻める。

4) 「継続型」

センターの動きに45はクロスであわせ、2対2で突破すると見せかけることで、次に行われる2対2のスペースを広げ、突破につながる動きである。

4. 結論

本研究では、ハンドボール競技におけるセンターをきっかけとする45との2対2の構造を明らかにした。その結果4つの型に類型化することができた。センターをきっかけとする45との2対2による突破のためには、基本的なハンドボールの技術のほかに、伸長能力、先読み能力により、動きを先読みし、図式化すること、状況シンボル化能力による状況把握、突破を見せかける技術などが挙げられる。対象とした試合では見られなかった型（「45の1対1突破型」、「リターン突破型」など）があると考えられるので、さらに例証を増やし研究をしていく必要を感じる。また、本研究では、センターと45の2ポジションの関わりに焦点を置いたが、今後、ポストなど、それぞれのポジションとの関わりや、チーム戦術などについても研究を深めていきたい。

5. 主な参考文献

- 1) 金子明友 (2002), わざの伝承, 明和出版
- 2) 佐藤 靖 (1998), ハンドボールにおける意味構造の例証分析的考察, 伝承, No.2, pp.71-92
- 3) 佐藤 靖 (1998), ハンドボール競技における運動研究の方法論的枠組みの検討(1) — 対応力をめぐって —, スポーツ運動学研究, No.1, pp.11-26